

営農情報

第9号 平成25年2月1日



「あまおう」2月の管理

南筑後普及指導センター

福岡大城農業協同組合

現在、V型や普通作型の1番果房が収穫のピークを過ぎ、出荷量がやや少なくなってきました。2番果房は、早期作型ではバラツキが非常に大きく出蕾～収穫開始、普通作型では、着果～緑熟となっており、平年に比べてやや遅れ気味です。やや株疲れした圃場も見られますので、しばらくは草勢を維持させる管理が必要です。一方、2月中旬以降は日照が多く、寒も徐々に緩むため、草勢が急に変化する場合があります。常に生育を観察し、株が急激に立ち上がらないように注意して下さい。

病害虫では、ハダニやアブラムシの発生が多く見られます。気温が高くなると害虫が増えやすくなりますので、気温の低い間に防除を徹底して下さい。また、高温管理しているハウスでは灰色カビ病の発生が懸念されますので、予防防除を行いましょう。

《温度管理》

- 3番果房が出蕾するまでは、生育促進のため高温管理とする。
- 3番果房の開花後は、果実品質向上のためやや低めの温度管理とする。
- 曇雨天日が連続する場合は、換気を重視し、午後は低めの温度管理を行う。
- 「灰色かび病」対策のため、日中は換気や循環扇により除湿を励行する。

	3番果房 開花前	3番果房 開花後
昼間	24～28℃	20～24℃
夜間	5～7℃	5℃

《かん水・肥培管理》

- かん水は、草勢維持のため少量で回数を多く行う（pF値1.7前後で管理）。
- かん水量は、出荷量の増加や温度上昇に合わせて徐々に増やす。
- 液肥は、1か月当たり窒素成分で2kg/10aを3～4回に分けて施用する。
- 例年、3月以降に先青果が発生しやすいほ場は、液肥の施用を控える。
- 3番果房の出蕾が遅れているほ場では、液肥施用による急激な立ち上がりが懸念されるので、施用を控える。

《電照》

- 電照時間は、心葉が伸び始めたら徐々に短くする。
- 電照の効果は、株疲れの程度、着果負担、天候により差があるので、常に心葉の展開状況を観察して、時間を調整する。
- 3番果房の出蕾初期には、点灯時間をやや長く設定して早期出蕾を促す。

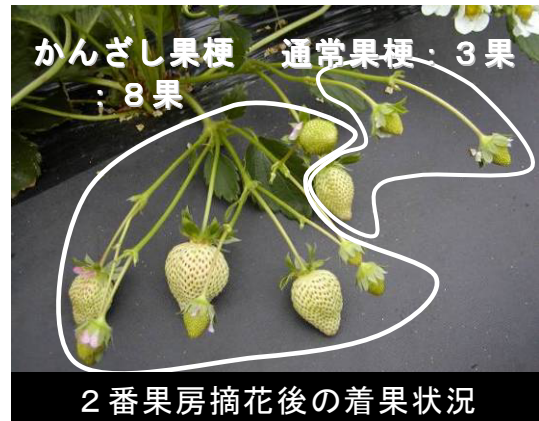
《摘果と株の整理》

- 2番果房以降の摘果は、次果房の出蕾を確認した後、連続的に収穫ができるように摘果数を調整して行う。
- 3番果房が連続しているほ場では、着果負担の軽減と収穫ピーク抑制のため強めに摘果を行う。

【 1枝当たりの着果数目安 】

通常果梗 :	3~5果/枝
かんざし果梗 :	6~8果/枝

※ 果房の状況に応じて調整する



- 収穫終了した果梗は、次果房の早期出蕾を促進するため、早めに除去する。
- 下葉は、枯葉や黄化した葉のみを除去する。

《病害虫防除》

(1) ハダニ類

- 下葉の除去後、葉裏に薬液がかかるように丁寧に防除する。
- ハダニの多発した株は、強めに葉かぎをして防除を行う。

(2) スリップス類

- 年内にハウス内で産卵していた場合、2月頃より活動しはじめる。
- 発生が確認された場合、すぐに防除する。

(3) うどんこ病

- 3月以降の多発期に向けて早期発見と予防防除が重要である。
- 電気加熱式くん煙器や定期的な薬剤散布による予防防除に努める。

(4) 灰色かび病

- 曇雨天の前など発生を想定し、予防的な防除を行う。
- 発病後は早急に被害果実を取り除き、防除を行う。

《親株管理》

- 定植時の葉は、炭そ病の感染源になる可能性が高いため、2月上旬までに除去する。
- 心葉が動き出す前から炭そ病の予防防除を開始する。

農薬の安全使用と飛散防止対策を徹底しましょう!